

残暑に秋風

土田龍太郎

芭蕉庵桃青かねて心にかけてし東路の道の奥せめて一たびきはめではやまじとてそぞろ神の催すままに江戸深川を出で發ちぬるは元祿二年彌生廿日なれど、はや白川の關を越え松島平泉象潟など名所^{なごころ}あまた經めぐりて後、加賀の金澤にしばし宿りさらに小松をさして杖を引きしは、同行曾良の旅日記をけみするに、すでに秋立ちぬる七月二十五日のことにてぞありける。

この日途中吟とて芭蕉翁のものせし

あかあかと日は難面^{つれなく}もあきの風

てふ一句、奥の細道に記せり。この句おもてはただ秋立つけはひをとりあへず口遊みたるばかりにおぼゆめれど、残暑に吹きそむる秋風のさりげなきさまをほのめかしていとも巧なればなほざりに見すぐすべきにあらず。

この句の解きやうさまざまなるべけれどそはいかにてもあれ、一句の字眼といひつべきは、日はつれなくもてふ中七字なるにまぎれなし。このつれなしの一言^{いひみ}にいかなる意のこもれりやしかと思ひわきまへではこの句の奥旨^{おくしめ}つひにあきらめがたかるべし。

そもこのつれなしの語義一とほりならず。近き世にてつれなしとはよそ人のわれにむかひてつらく情なく、もの云ひかくるともいらへだにはかばかしからぬほどとうとしきさまをもはら云ふなれど、かかる云ひざま古き世になきにしもあらで、古今集に入りぬる

月影にわが身をかふるものならばつれなき人もあはれとや見む

てふ一首の内にはや認めうべし。

これとはかはりて、よそ目にはつらくあやふくまたむつかしく見ゆることにのぞみたりとも、おもてにはさあらぬさまにもてなしていともものどかなるをつれなしといへるためしまた古き世には少なからず。枕草子に

いささかなにとも思ひたらずつれなきもいとねたきを^{云々}

と記し、また源氏物語須磨巻に

下には思ひくだくべかめれどほりかにもてなしてつれなきさまにしありく^{云々}と述ぶるときのつれなし、いづれもさりげなく知らぬ顔なるをいへるにまぎれなし。

同じ發句を芭蕉翁、人の請ふにまかせて揮毫せしことあれど、これ眞蹟とて今に遺りたり。文字こそは奥の細道に記せるに異らね、端書といひつべき筆の跡の句に先立てること左のごとし。

旅愁なぐさめ兼てもものうき秋もやゝいたりぬればさすがにめにみえぬ風の音づれも
いとどかなしげなるに残暑なほやまざりければ

あかあかと日はつれなくも秋の風

この題詞いとも言短かなれば、これのみにては芭蕉翁いかなる意もて残暑つれなしと云ひ
たりやとみには定めがたきぞあいなき。

碩學文豪の譽れこよなきかの幸田露伴翁、いまだ若かりしころより俳諧道の巨匠にても
ありしこと知らでやみなましかばいともかたほならまし。老いてなほ日々に努めて倦まざ
りしは猿蓑に初まるいはゆる芭蕉七部集の評釋にほかなけれど、かかる述作この蝸牛庵主
のまたなき造詣蘊蓄と風尚諧謔なかりせばかつて成就すまじかりしこと云ふをまたじ。庵
主のみまかりし昭和二十二年七月にやや先立てる同じ年の三月にはじめて稿を了へたりし
評釋七部集、まさに露伴畢生の大業といひてはばかりなかるべし。

近き世の歌人大田水穂、芭蕉俳句研究會を催せしことあり、そのをりごとにあらかじめ幸
田露伴翁を訪ひて評釋を請ひしかど、そのとりし聞書のたぐひ芭蕉俳句研究なる題號にて
大正九年より十年にかけて潮音といへる雑誌の連載記事となれり。このとき潮音誌上に、右
の途中吟につきて露伴翁の語りし評釋も載りたれど、これさしも長からねば左にさながら
引きみるべし。

途中

あか／＼と日はつれなくも秋の風

秋の夕日が野山にさしたるところは、實際あか／＼として又つれなさを感じるもの
だ。杜甫が落第の人かなんぞおくれた句の、風吹客衣杲杲かうかうに面影が通つてゐる。「つ
れなくも」も聯想される。

右につれなさを感じずと記せるは、秋の日照りの旅客になほ熱くつらくおぼゆるを云へるな
るべし。また杜子美の一句に芭蕉發句を聯想せるなる露伴翁、つれなしを情なさけなしつらしの
意にとれることほぼ疑ひなし。風吹客衣杲杲とはをりからの天氣の旅客を悩ませるさまを
云へるゆゑなり。さはれかくのみ釋きてこと足れりとせば、一句のおもむきをまさしく捉へ
えたりとはをさをさ云ひがたからまし。

すでに七月に入りてほど經ぬれば秋風は吹きそむれど音いまだ聞えず。空は赫かがやきわたり
て暑きことなほ夏のさ中と變らねば、天つ日はそも秋の至れるをすでに知れりやいまだ知
らずや、たえて知らざるにてもあらざるめれど知らざるがごとくもてなしてところえがほ
にほこりに照りてやまざるはうたてにくげにもおぼゆるぞかし。

わづか十七字をかくまで云ひ延べむはさすがこちたかるべけれど、右のごとくに釋きて

こそ一句を芭蕉翁の心にそひつつあらあら捉ふるをうべし。露伴學人の思へるごとく天の
日が旅客にとりてつらくつれなきにてはあらず、残暑を秋風にむかへてそのさまをつれな
しと云ひたるなり。さればこのつれなしの一言、知らぬがほにてさりげなしの意にとらざ
るべからず。

わがかく論ひきたるは、おのがさかしらにまかせておほけなくも蝸牛庵主の高説に瑕を
ことさらに求むるにたれば、世のかしこき物識り人にもどかれまじきにもあらじ。おほか
た芭蕉發句のあれこれ、その奥旨を尋ねむに露伴學人のあらかじめ説けることいささかだ
にもあらばそをさしおきてやむまじきはさることなれども、露伴俳話にもなにとやらむひ
とかたによりて見ゆるところなきにあらず、その學殖識見のならびなきを仰ぐにまかせて
たえてひがごとなしと思ひ定めむはなかなか危からでやはあらむ。さればをりをりにはわ
が鄙見のかたそばかりを述べむともさらにえうなしとてうち棄つべきにもあらじかし。

唐の張蘊古の大寶箴に

四時不言而代序 萬物無言而化成 豈知帝力而天下和平

と記せるはいともよしありげにてめでたくおほゆれど、これ論語陽貨篇に

子曰夫何言哉四時行焉百物生焉天何言哉

と云へるに由れるごとし。またかの卜部兼好

折節のうつりかはるこそものごとにあはれなれ

と徒然草に説けれど、四時交替げにさまざまにて、あらはなるありひそやかなるもあり、あ
るいはすみやかにまたはゆるやかにて一とほりならず、いづれおもしろきはさることなれ
ども、右にけみせし金澤小松の途中吟、旅の記を披き見るごとに心とまりゆかしさいやまさ
りておぼゆるはいかなるゆゑならむ。

かたへ涼しき風吹くをも知らぬがほになほほこりに照れる残暑の日の光のこにくきさま
を、日はつれなくもの七字もてしかと云ひとめたるわざ、ここに伺はるる俳聖の鏤骨の跡い
みじきこといはむかたなし。

(令和七年四月二十四日受附)